



Title	「のではなく」の機能
Author(s)	小金丸, 春美
Citation	阪大日本語研究. 1991, 3, p. 45-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10797
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「のではなく」の機能

On the Function of *Nodewanaku*

小金丸春美

KOGANEMARU Harumi

キーワード：「のだ」，「のではなく」，「ではなく」，名詞句化，フォーカス

1. はじめに

1—1 文末の「のだ」「のではない」の機能

日本語の文末に用いられる形式の一つに「のだ」がある。(以下、「のだ」を「んだ」「のです」「んです」「のである」「の」等の代表形とする。)否定にすると、「のではない」(「んじゃない」)といった形になる。まず、この「のだ」「のではない」の機能について、簡単に見ておきたい。¹⁾

「のだ」が用いられる典型的な例は、次のような文である。

(1) 学会には行けません。用事があるんです。

(1)では、「学会に行けない」とと「用事がある」ととに何らかの関係(この場合は因果関係)があることが「のだ」によって示されている。このような「のだ」は「関係付け」とでも言うべきムードを持つ助動詞である。

また、「のだ」「のではない」は次のような文でも用いられる。

(2) 悲しくて泣いてるんじゃない。

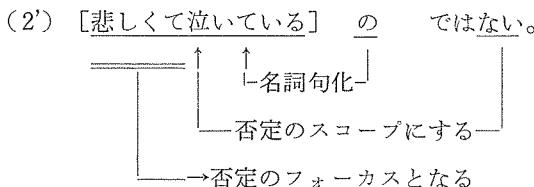
(3)*悲しくて泣いていない。

(4) 剛は、雪子と出かけたのではない。美咲と出かけたのだ。

(2)では、「泣いている」理由が「悲しくて」ではない、ということを言うためには、「のではない」という形を用いなければならない。この形を用いずに、否定の「ない」を用いた(3)の文は「泣いていない」ことにな

ってしまい、不自然である。

(2)の文の構造を簡単に図式化すると、下のようになる。まず、「の」の持つ準体機能によって、「悲しくて泣いている」の部分が名詞句化される。そうすると、「ない」という否定のスコープは、「悲しくて泣いている」という部分になる。その中で、「悲しくて」という部分が否定のフォーカスとなる。



このように、(2)(4)の「の (だ)」「の (ではない)」は、その前の部分を名詞句化することによって、「悲しくて」「雪子と」「美咲と」といった部分を否定や肯定のフォーカスにする機能を持っている。

ここで、(1)のような「のだ」をムードの「のだ」、(2)(4)のような構文的な機能を持つ「のだ」をスコープの「のだ」と呼ぶ。「のだ」の機能は大きく分けると、この二種類であり、両者は連続性を持つものと考える。「のではない」という否定の形は、基本的に、スコープの「のだ」の場合にのみ現われる。

1—2 「のではなく」文をめぐる問題点

「のだ」の、いわゆるテ形に相当する形は「ので」という形であり、「のではない」の運用形に相当する形は「のではなく」、テ形は「のではなくて」という形になる。²⁾本稿では、この「のではなく」の機能について考察する。以下のような点が問題となる。

第一に、「のではなく」文には、(5)のように「～のではなく、…のだ」という形をとる文と、(6)のように文末に「のだ」を伴わない文がある。両者を包括的に扱うことができるだろうか。

(5) 剛は、雪子と出かけたのではなく、美咲と出かけたのだ。

(6) 定住外国人の権利保障を実質的に前進させる上で、地方自治体が

果たす役割は大きい。（中略）國の指示を待つのではなく、自治体本来の主体性を發揮してほしい。（朝日新聞1990.6.16朝5社説）

第二に、否定の接続形式としては、他に、「ないで」「ずに」「なくて」といった形がある。「のではなく」という形は、これらの接続形式と、どう違うのだろうか。

以下、2. で第一の問題を、3. で第二の問題を考察し、4. で「のではなく」の機能についてまとめる。

2. 「のではなく」文の考察

2-1 文末に「のだ」を伴う「のではなく」文

「のではなく」文は文末に「のだ」を伴うことが多い。次のような文である。

(7) 剛は、雪子と出かけたのではなく、美咲と出かけたのだ。

(8) 罪を犯した人の多くは、罪をつぐないたいから懺悔するのではなく、報いを受けたけないから懺悔するのである。

（宮本輝『避暑地の猫』p.101）

このような文の「のではなく」は、(9)のような「のではない」と同様の機能を持つものと、一応考えられるだろう。

(9) 剛は、雪子と出かけたのではない。³⁾ 美咲と出かけたのだ。
したがって、(7)の文は次のように表される。

(7') 剛は [雪子と出かけた] のではなく、[美咲と出かけた] のだ
 || ||
 否定のフォーカス 肯定のフォーカス

ここで、(7)(8)の文を簡単に図式化すると、(10)のようになる。〔 〕内は、「の」によって名詞句化された部分、「の」の後の○×は、〔 〕の内容が文末の肯定の対象として適切であるかどうか（○：適切、×：不適切→否定の対象）を示している。波下線部は、否定や肯定のフォーカスとなる部分を示している。

- (10) [p] の一×
 [q] の一〇一肯定

2—2 文末に「のだ」を伴わない「のではなく」文

「のではなく」文は、文末に「のだ」を伴うものばかりではない。文末に「のだ」を伴わない「のではなく」文とは、次のような文である。

- (11) パチンコ献金をめぐる与野党の非難合戦は自党に都合がいいところをつまみ食いするような態度が目立ち、見苦しかった。各党とも選挙用の挙げ足取りに終始するのではなく、ずさんな政治献金の扱いを反省して、政治倫理の確立や政治改革に役立てることを考えるべきだ。
 (朝日新聞1989.11.6朝5社説)

- (12) (ボケの実の食べ方を知りたいという質問に答えて)
 社調理師専門学校「(前略) 生で食べるのではなく、果実酒か砂糖漬けにすればいいでしょう」。

(朝日新聞1990.5.9朝30はい社会部です)

- (13) (地方自治体は) 国の指示を待つのではなく、自治体本来の主体性を発揮してほしい。
 (= (6))

- (14) 堀田さんは「肥満は糖尿病などに結び付くだけでなく、それ自体が病気。満腹感を楽しむのではなく、摂取カロリーを考えた食事をしてほしい」といっている。
 (朝日新聞1989.12.13夕7)

この形をとる文には、(11)(12)のように文末に当為表現が用いられた文や、(13)(14)のように「てほしい」という希望の形をとりながらも実質的には当為表現に近いものが、比較的多い。

また、次のような例もある。

- (15) 冷戦、封じ込め政策など戦後の基本軸が変わり始めた。それを座視するのではなく、積極的に活用する姿勢が、いま日本に求められている。
 (朝日新聞1990.5.15朝1「冷戦後」への模索)

(15') [それを座視するのではなく、積極的に活用する] 姿勢
 (15')では、(15')のように、「のではなく」が「姿勢」を連体修飾する節内に含まれているようだが、連体修飾を受ける名詞の後に目を向けてみると、

「(姿勢が) 求められている」といったように、やはり当為表現に連続するような表現が続いている。

ここで、(11)～(14)の文を簡略化して(16)のように表す。

(16) P のではなく、Q + 当為表現

すると、P、Qの内容は、それぞれ次の通りである。

P : 望ましくない事態 Q : 望ましい事態

- | | | |
|-------|---------|--|
| (11') | 選挙用の挙げ足 | ざさんな政治献金の扱いを反省して、政治倫理の確立や政治改革に役立てることを考える |
| | 取りに終始する | |
| (12') | 生で食べる | 砂糖漬けにする |
| (13') | 国の指示を待つ | 自治体本来の主体性を發揮する |
| (14') | 満腹感を楽しむ | カロリーを考えた食事をする |

これらの文を簡単に図式化しておく。

(17) [P] のー×···

Q ——○—当為表現 (～べきだ、～てほしい、···)

2-3 「のではなく」の機能（仮説）

2-1で、文末に「のだ」を伴う「のではなく」文を次のように図式化した。

(18) [p ······] のー×···

[q ······] のー○—肯定 (= (10))

2-2では、文末に「のだ」を伴わない「のではなく」文の一種を次のように図式化した。

(19) [P] のー×···

Q ——○—当為表現

(18)と(19)を考えあわせると、文末に「のだ」を伴う場合も、伴わない場合も、「のではなく」の機能は共通しており、次のようにまとめられる。

◆ 「のではなく」の機能（仮説）：

「の」によって、文の一部を真正モダリティを持つ前の段階で名詞句化した上で否定するという構文的機能を担う。⁴⁾

なお、「のではなく」文の文末に当為表現が比較的多く現われるという

ことについては、統語的な面からの考察だけではなく、語用論的な視点からの考察も必要であろうと思われる。

3. 他の否定の接続形式との比較

3—1 動詞の連用形、テ形接続

この章では、「のではなく」と他の否定の接続形式との違いを考察する。まず、動詞の連用形、テ形の接続形式の機能を簡単に見ておきたい。連用形、テ形でつながれた前の部分をP、後の部分をQと表すと、連用形、テ形の担う意味は、次のように分類できる。

P が Q を限定・ 修飾	主語は同一、P は Q に伴う → 付帯状況		(c f. 南(1974)テ ₁)
	P は Q の原因・理由である → 原因	(c f. 南(1974)テ ₂)	
P と Q が対等	時間的前後関係 → ある → 繰起		(c f. 南(1974)テ ₃)
	→ ない → 並立	(c f. 南(1974)テ _{3,4})	

P の述語が肯定か否定か、P と Q の主語が同じか異なるか、を軸として、各接続形式の持つ主な意味を、上の分類によって表したのが下の表である。

なお、連用形接続とテ形接続、「ないで」と「ずに」の間には、それぞれ多少の違いは見られるようだが、ここでは一括して扱っている。

P の述語	主語が同一				主語が異なる			
	付帯	原因	継起	並立	付帯	原因	継起	並立
肯定 連用形 ・テ形	◎	◎	◎	○	×	◎	◎	◎
否 定	なくて	×	◎	×	○	×	◎	??
	ないで	◎	??	?	?	×	??	?

5)

以下、上の表の内容を見ていく。P の述語が否定の場合は、便宜上、P(ない) と記すことにする。

P と Q の主語が同一の場合、肯定の連用形、テ形は四つの意味をすべて表すことになるが、実際は、P の述語が無意志動詞の場合は原因を表すことが多く、意志動詞の場合は付帯状況や継起を表すことが多いという傾向がある。

(20) 僕は、階段から落ちて、けがをした。(原因)

(21) 僕は、カバンを持って、大学に行った（付帯状況）

(22) 僕は、銀行に行って、デパートに行った。（継起）

その傾向は、Pの述語が否定になったとき、「なくて」と「ないで」の使い分けとなって、顕在化する。P（ない）が原因を表すときは「なくて」が用いられ、P（ない）が付帯状況を表すときは「ないで」が用いられる。

(23) 僕は、答えがわからなくて、友達に聞いた。（原因）

(24) ??僕は、答えがわからないで、友達に聞いた。

(25) 僕は、カバンを持たないで、大学に行った。（付帯状況）

(26) *僕は、カバンを持たなくて、大学に行った。

なお、Pの述語が否定のときは、純粹な継起の意味にはなりにくく、P（ない）がQを限定・修飾する意味合いを持ちやすいようである。

(27) 僕は、銀行に行かないで、デパートに行った。（継起？）

また、主語が同一の場合、並立を表すことは少ないが、次の(28)のようなものは並立と考えられる。

(28) 彼は、英語ができて、フランス語もできる。（並立）

(29) 彼は、英語ができなくて、フランス語ができる。（並立）

次に、PとQの主語が異なる場合について、考察する。主語が同一の場合と比べると、PとQの並立を表すことが多く、付帯状況を表すことはない。

(30) 夏子は買物に行き、冬子は映画を観に行った。（並立）

Pの述語が否定の場合、「ないで」と「なくて」の分布は複雑だが、「ないで」は並立を、「なくて」は原因と並立を表すようである。

(31) 夏子が来ないで、冬子が来た。（並立）

(32) 雨がなかなか止まなくて、夏子は帰れなかった。（原因）

(33) 夏子が来なくて、冬子が来た。（並立）

以上の考察から、「ないで」「なくて」の機能を簡単にまとめておく。PとQの主語が同一の場合、「Pないで／なくてQ」は、P（ない）とQの純粹な継起・並立を表すことはまれで、P（ない）がQを限定・修飾するのがふつうである。主語が異なる場合は、P（ない）とQの並立を表すこ

とが多い。

3—2 名詞のテ形接続

Pの述語が名詞の場合、テ形接続の肯定の形は、次のように主に並立を表す。

(34) 林さんは、大学生で、作家だ。 (並立)

(35) 林さんは学生で、お姉さんは作家だ。 (並立)

また、否定の形も、次のように、並立を表しているように見える。

(36) 林さんは、大学生ではなく、高校生だ。

ここで、「ではなく」の論理に関するティノコ（1988）の考察に触れておきたい。ティノコは、「ではなく」は「否定した内容（S₁）は、S₂の内容を除外しなければならない」という論理で働く。つまり、S₁の内容とS₂の内容は話し手の観点から言えば同時に成り立たない」(p.19) とし、次のような例を挙げている。（以下、(37)(39)～(42)の例文および適格性の判定はティノコによる。⁶⁾）

(37) 花子は馬鹿ではなく、(むしろ) 利口だ。

(38) 彼女の言葉は、大阪弁ではなく、京都弁だ。

(39) *花子はバスではなく、感じがいい。

(40) *太郎は金持ちではなく、頭がいい。

ティノコは、(37)のように「馬鹿」と「利口」という反対語の場合は「ではなく」を用いることができるが、(39)の「バスであること」と「感じがいいこと」、(40)の「金持ちであること」と「頭がいいこと」のように、互いに除外しない関係の命題を並べる場合には、「ではなく」を用いることはできない、と述べている。

また、ティノコは、「ではなく」は、「現実的、または潜勢的な評価の修正」を含まなければなら」ず、「共通のテーマ」がなければならない」(p.20)として、次の例を挙げている。

(41) *銀行は開いているのではなく、今日は日曜日だ。

(42) 開いているのは銀行ではなく、両替所だけだ。

以上のティノコの考察を、簡単にまとめておく。：

「PではなくQ」という形は、Pが成立しないこととQが成立することとを純粹に並立的に並べるものではない。Pを否定し、その修正として、Pと相互除外的なQを提出するものである。

「PではなくQ」という文において、PとQが「相互除外的」でなければならない、とするティノコの主張は言い過ぎであろう。次のように、純粹に並立的な文も成立しうるからである。

(43) 彼は、金持ちではなく、秀才でもなく、性格も悪い。

しかし、「相互除外的」になる場合が多い、というのは事実だと思われる。特に、二つの命題だけを並べた場合は、「相互除外的」になるのが普通である。

(44) 彼は、中学生ではなく、高校生だ。

(45) ??彼は、金持ちではなく、鈍才だ。

(46) 今日は、日曜日ではなく、祝日だ。

以上のことから、Pの述語が名詞の場合の「PではなくQ」という形は、Pが成立しないこととQが成立することの純粹な並立を表すことはまれで、Pを否定し、その修正として、Pと相互除外的なQを提出することが多い、と言えよう。

3—3 「ないで」「なくて」と「のではなく」

3—1で、「ないで」「なくて」という形は、とくにPとQの主語が同一の場合、P（ない）がQを限定・修飾するのがふつうであるを見た。このような「ないで」「なくて」を「のではなく」で置き換えることはできない。

(47) 純はカバンを持たないで学校に行った。（付帯状況）

(48) *純はカバンを持つのではなく学校に行った。

(49) 時間が足りなくて困っています。（原因）

(50) *時間が足りるのではなく困っています。

また、「ないで」「なくて」という形は、とくに主語が異なる場合には、P（ない）とQの並立を表すことも見た。このような場合には、「のではなく」との差は少なくなる。

(51) 夏子が来ないで、冬子が来た。(並立)

(52) 夏子が来なくて、冬子が来た。(並立)

(53) 夏子が来たのではなく、冬子が来たのだ。

さらに、文の階層構造を考えたときに、「のではなく」と「ないで」「なくて」はどう違うか、ということについても触れておきたい。

(54) 炒めないで煮るのではなく、軽く炒めてから煮たほうがよい。

(55) *炒めるのではなく煮ないで、軽く炒めてから煮たほうがよい。

(56) 雨が降らなくて困っているのではなく、降り過ぎて困っているのだ。

(57) 夏子が来ないで冬子が来たのではなく、冬子が来ないで夏子が来たのだ。

(58) *夏子が来たのではなく冬子が来ないで、冬子が来たのではなく夏子が来た。

(59) 夏子が来なくて冬子が来たのではなく、冬子が来なくて夏子が来たのだ。

(60) *夏子が来たのではなく冬子が来なくて、冬子が来たのではなく夏子が来た。

(54)～(60)のように、「のではなく」は、その節内に「ないで」「なくて」を含むことができるが、逆はできない。したがって、文の階層構造上、「のではなく」が上位（外側）にあると言える。

3—4 「[名詞]+ではなく」と「のではなく」

次に、3—2で見た「ではなく」の性質と「のではなく」との関係について見ておく。「PではなくQ」という形は、Pを否定し、その修正として、Pと相互除外的なQを提出することが多いという性質を持っていた。「のではなく」は、どうだろうか。

(61) 彼女は、大阪で生れたのではなく、京都で生れたのだ。

(62) *花子は気が弱いのではなく、体力があるのだ。

(61)では、「大阪で生れた」と「京都で生れた」ことは、相互除外的であり、「のではなく」は自然である。(62)では、「気が弱い」とこと

と「体力がある」ことは、相互除外的ではなく、「のではなく」は不自然である。このように、「のではなく」も、「ではなく」の性質（「相互除外」性、「修正」の性質）を持っていると言えよう。

(63) 銀行が開いているのではなく、両替所が開いているのだ。

(63)では、「銀行が開いている」とこと「両替所が開いている」とことは、本来、相互除外的な事柄ではないが、どちらか一方しか開いていない、という相互除外的な捉え方をするときに限り、「のではなく」が自然に用いられる。相互除外的に捉えていない場合には、(64)のように「なくて」等が用いられる。

(64) 銀行は開いてなくて、両替所は開いている。

3-5 「のではなく」と他の否定の接続形式（まとめ）

以上の考察から、「のではなく」と他の否定の接続形式との異同を簡単にまとめておく。

「Pなくて／ないでQ」という文では、PとQの主語が同一の場合、P（ない）がQを限定・修飾し、PとQの主語が異なる場合、主に、P（ない）とQとの並立が表される。それに対して、「PのではなくQ」という文は、（「[名詞] +ではなく」の文と同じ形をとるため、）Pが成立しないこととQが成立することとの純粹な並立ではなく、Pを否定し、その修正としてPと相互除外的なQを提出するときに、用いられる。

4. 「のではなく」の機能再考

4-1 フォーカスの問題

3-4で、「のではなく」文が「[名詞] +ではなく」の文と共通する性質を持っていることを見た。ここで、もう一つ、両者の共通点を見ておきたい。まず、「[名詞]+ではなく」の文について、その否定のフォーカスを考えてみる。

(65) 山田さんは学生ではなく助手だ。

(66) 山田さんは学部生ではなく、院生だ。

(67) 山田さんは文学部の学生ではなく、法学部の学生だ。

- (68) 山田さんは文学部を卒業した人ではなく、法学部を卒業した人だ。
 (69) 山田さんは去年卒業した人ではなく、去年入学した人だ。

(65)～(69)では、「ではなく」の前の波下線の部分が否定のフォーカスとなっている。つまり、「[連体修飾部]+[名詞]」の中の一部が否定のフォーカスとなっている場合が少なくないということである。

次に「のではなく」文の否定のフォーカスを見てみる。

- (70) 山田さんは文学部を卒業したのではなく、法学部を卒業したのだ。
 (71) 山田さんは去年卒業したのではなく、去年入学したのだ。
 (72) 私が裕子に電話したのではなく、裕子が私に電話したのだ。
 (73) これはもらったのではなく、買ったのだ。

(70)～(73)のように、「のではなく」文も、「の」によって名詞句化された中の一部がフォーカスとなることが多い。つまり、「[名詞]+ではなく」文と「のではなく」文では否定のフォーカスに関して同様の現象が見られる。したがって、「のではなく」の「の」はその前の部分を名詞句化するという構文的な機能のみを担っていると考えられる。

4—2 「のではなく」の機能（仮説の修正）

3. 及び4—1での考察を踏まえて、2—3で立てた、「のではなく」の機能に関する仮説を見直したい。「の」の機能と「ではなく」の機能とを区別して、次のように修正する。

- ◆「の」は、文の一部を真正モダリティを持つ前の段階で名詞句化するという構文的機能を担う。
- ◆「の」によって名詞句化した上で「ではなく」によって否定すると、「[名詞]+ではなく」と同じ形になり、次のような特徴が生まれる。
- ◇「PのではなくQ」はPの修正として、Pと相互除外的なQを提出する。
- ◇名詞句化したPの一部が否定のフォーカスとなることが多い。

今回扱った「のではなく」だけではなく、他の「の（だ）+[接続助詞]」という形の機能を分析することによって、文末の「のだ」「のではない」の機能もより明らかになると思う。現在、そういう考察を進めていると

ころである。

注

1) 「のだ」「のではない」の機能については、詳しくは、小金丸（1990）を参照していただきたい。

2) 「のではなく」は主に書き言葉で、「のではなくて」は主に話し言葉で用いられるが、その機能に大きな違いはないと思われる。

3) ただし、(i)の文末の「のだ」が落ちた(ii)のような文も不適格ではない。

(i) 剛は、雪子と出かけたのではなく、美咲と出かけたのだ。

(ii)?剛は、雪子と出かけたのではなく、美咲と出かけた。

この例からは、肯定の場合はスコープの「のだ」は必要でないようにも見える。

しかし、次のような例を見ると、肯定のフォーカスを示す場合にも、「のだ」が必要とされることがわかる。

(iii) 剛は、美咲と出かけたので（あって）、雪子と出かけたのではない。

(iv)*剛は、美咲と出かけて、雪子と出かけたのではない。

(iii)のように、「のだ」の方が「のではない」より先に用いられる場合、つまり、肯定のフォーカスの方が否定のフォーカスより先に示される場合は、「のだ」は必須である。(ii)では、否定のフォーカスが先に示されているため、文末の「のだ」の必要性が低くなっているものと考えられる。ただし、「のではない」の方は文末に用いられる場合も必須であり、(V)は不自然である。

(V)?剛は美咲と出かけたので（あって）、雪子と出かけなかった。

このように、否定の場合と肯定の場合との差は確かにある。

4) 「の」が名詞句化した中には、モダリティの形式が含まれることもある。

(vi) 雨が降るかもしれないのではなく、今にも降りそうなのだ。

しかし、これは疑似モダリティ形式（「過去や否定になることがある、話し手以外の心的態度を表すことのある表現形式」仁田（1989）p.35）に限られる。話し手の発話時現在の心的態度のみを表す「だろう」のような真正モダリティ形式は、「の」による名詞句化に含まれることはない。

(vii)*雨が降るだろうのではなく、降るまいのだ。

5) Pの述語が形容詞である場合は「なくて」が用いられ、「ないで」は用いられないといった違いがあるが、ここでは動詞の場合に限って表にした。

6) ティノコの考察は「[名詞]+ではなく」に限らず、「のではなく」「わけではなく」等の「ではなく」も同じ性質を持つものとして考察の範囲に含められているが、「のではなく」自体についての詳しい考察は行なわれていないので、本稿で改めて「ではなく」と「のではなく」を区別して考察を行なった。

参考文献

- 北川千里 (1979) 「「なくて」と「ないで」」『日本語教育』29
- 久野 嘉 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 久野 嘉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 小金丸春美 (1990) 「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」『日本語学』9-3
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3-12
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5
- ティノコ, アントニオ・ルイズ (1988) 「「デハナク」の論理について」『言語学論叢』6・7 筑波大学一般・応用言語学研究室
- 戸村佳代 (1986) 「「なくて」、「ないで」再考」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』1
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄, 益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店

資料

- 『朝日新聞』 1989.12.13 夕刊4版 朝日新聞大阪本社
 1990.6.16 朝刊13版 朝日新聞大阪本社
 その他 朝刊14版 朝日新聞大阪本社
- 宮本 輝 『避暑地の猫』講談社文庫1988

(文学部日本学科院生)